ずタイプに当った。しかし繊細な子実体の一部を切取ると，あまりに目立つのでルーペで観察する程度に止めた。柄は赤褐色，頭部は濃い飴色でその表面に埋生の被子器の頭部による乳頭状突起が密生している。ここに Massee による記載の一部と図を挿入するが2-3の間違いがある。被子器が表面生としてあり，子実体の頭部が柄の上端より急に膨大しているのは何れも間違いである。幸に Mains が Kew Herb. の菌類学者 Dennis の好意により標本の小さな破片を入手して検べた記録があるのでここに再録する。"Perithecia are immersed except for the ostioles, ovoid to ellipsoid, 200-250×85-150 μ and the asci cylindric, 90-135×3-4 μ. No clearly differentiated ascospores or part-spores were found". 子嚢胞子の長さが Massee の記載のように短いものであって，しかも成熟しても2次胞子に分裂しないとすれば *Ophiocordyceps* 亜属に編入されるべきであるが，この標本でしらべられる限りでは確信が持てない。斯様な場合にタイプから委しい真実を捉むことは無理である。タイプと外観が極めてよく似ている新しい個体を世界のどこかで発見し，よく成熟させて記録をとるより他によい方法がなかろう。但し子実体が又状に分岐することは必ずしも種の特徴ではない。幸に Hennings が発表した *C. wittii* があり，Petch がこれを *C. caloceroides* と同一ではないかという意見を述べている。*C. wittii* のタイプはベルリンの Dahlem にあって戦災で消滅して仕舞ったが，後に *C. wittii* と同定された標本が Kew で見付った。この委しい観察は後に発表する。なお Petch は *C. wittii* の寄主がクモである点から推して *C. caloceroides* の寄主もクモであろうと云っている。この種名は美しい角という意味で，トレメラ類に *Calocera* という属がある。しかしこの冬虫夏草に与えられる名としてはどういうものか。

□Siebold: **Flora Japonica** シーボルト：日本植物誌の覆刻版，講談社（東京），IX 1976, 390,000円。すごく高い本である。限定版470部。Text 1冊，図版は無色のもの150図版で一冊，同じ図版で着色したもの1冊，計2冊，それに84頁の解説1冊から成る。解説はまえがき（本田正次），シーボルトと植物学（木村陽二郎），シーボルトと民俗植物学（北村四郎）につづいて図版の種類の解説がある。これは本田，北村及び岡田喜一の三氏の筆に成る。さらにオランダ園芸振興会社に栽培された日本および中国植物目録（北村），日本植物誌の出版年代（北村），あとがき（北村），図版目録となっている。近頃種々の書物が覆刻されるのはまことに有難いが，高価であり過ぎるものがあるのは考え物である。なお原著の出版は，第一巻 fasc. 1-20，図版 1-100 は1835-1841の各年に少しずつ出た。第二巻は fasc. 1-6，図版101-127が1842年と1844年，text 34頁が1844年にでて，それからは著者の死，ひきつづく Miquel の加筆で，残りは vol. 2 fasc. 6-10，図版 128-150, text 35-89頁がまとめてずっとおくれて1870年出版であったという。（前川文夫）